

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

竹取物語!^{たけとりものがたり}

ステイホームのなかで、テレビ番組をふと見て驚嘆した。いつも、おいしいと食べていたタケノコ。その広い竹林の一部がどっと白く枯れてしまった。映像の竹は、120年に一回おしべとめしべの花(花弁はない)を咲かせ、風にまかせて受粉させ、その後、一挙に枯れてしまうという。横へ横へと地下茎をのばしていく繁殖法では種の保存が危ういのか…。

種の保存に自分の命をかけるふしぎな竹の(生きのび方)を映像で見て、なぜか『竹取物語』を思いだした。これもまた、竹から不思議な霊力をもらった命の物語である。竹取の翁は竹から生まれた三寸ほどの女の子を大切に育てる。やがて娘はかぐや姫として美しく成長する。その美しさは都中の評判となり、名だたる貴族たちが求婚にくる。かぐや姫はその求婚者に無理難題を次々にぶっつけ、全員をはねつけてしまう。最後には帝の求愛も断り、天に帰っていくという物語である。

我が国の物語文学の祖ともいわれているこの話の舞台は宮廷ではなく、貧しい竹取の翁の家である。翁は竹やぶから何度も黄金を見つけ、やがて長者になる。これは貧しくても一所懸命働

いて生きれば、夢がかなうという庶民のあこがれの長者譚である。また、月の進行で時を刻み繁殖力や豊穡の源とされてきた「月信仰」などもこの物語の背景にある。さらに、貴族社会の名だたる5人の求婚を断わるこの物語は超大作ドラマのようである。「蓬莱山の玉の枝」を持つてくるようにいわれたある皇子は約3年をかけて取って来た。ところが、それは6人の鍛冶工に作らせたものと分かってしまい、皇子は一生の恥と深山に入り、行方不明になってしまう。長者譚やすべての求婚者が断られる様などに『竹取物語』は社会的に底辺に置かれた人々の王朝文化へのたくまざる風刺が読みとれるように思う。

私の一番の疑問は王朝文化はなやかな平安時代に誰が『竹取物語』を書いたのだろうかということである。この疑問は解けていないが、竹の文化については記された書籍に興味深いものがあった。竹の文化は中国大陸の江南系と南太平洋の島々などから、この日本列島の南端に入ってきたという。農漁業具、建築資材、楽器、武道具、茶道具等々、たくさん竹の文化を生みだし、社会を支えてきたのも底辺に置かれてきた人々なのだと思う。

■ 教育政策課

戦後76年^{せんご76ねん}

8月は、広島・長崎での平和祈念式典、全国戦没者追悼式が行われます。

ある新聞には、種子島沖に旧日本海軍機が沈んでいる可能性があるとして、厚生労働省が乗組員の遺骨収集の作業を行ったという記事が載っていました。まだまだ南太平洋や東南アジアなどには、収集することができていない遺骨もあるということです。このこと自体が戦争の悲惨さを物語っているようです。

祈念行事の際には、黙とうが呼びかけられます。一緒に戦争や平和について考えてみたいですね。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。